78
3869
16

拾名物抄

へ利9
3869
16

家に双六の振はし𛀁咲しをまし
通一居岷江主人ハ浮世ハ世事にうと
振向きもせぬ風雅の道に心をよせ若ト
言ふもすへて唯四季ノ句ばかりに暮
せし琉補雅人家主ハ早カ友とゆへ
何うか夜句の中秋あらんとて尋
出し是より岷江ハ於吟の縁子

一

特
門 へ 利 9
號 3869
巻 16
大正七年十二月十六日
室井平藏氏贈

なりゝに幸ひとそ櫻木まうけを
種芋頒と名附く折句の雜句を
小冊と迫弘免度而に赤くなりゝ
帛に紙を席をいとせとて進りれ
ゑしめ小蕉して清笑叫仰侍れ

天保五甲午年七月日
日本橋二丁目木原店
如月庵
八十二翁筆

カキハ
川風子畢居ちうも 拾大工
発生氣をくさぐさの花の色
洗砧きぬ〳〵きき 彩階子
竹仮名のきの字 拾拾の羽子似て
幸子歌乃利て 仰向奥の宍
令箱を小へ夜 賀の冥子声
買てうゝ氣 ゑなる安ひ 拂扨
合点しもて 嵩る綿も孤ゝく

髮結の氣も弱くなる盡のゆるみ
上下（キリ〳〵ス）撓（ハ）花上指頭地
弓架の極をつけるたゝ川堅り
圍女の彼（キリヤウ）俤くゝる花り山
行足世ハ樹屋ゝ嫁て初むし
金のなりまを拔とゝる変古弟
結彼也樹やゝ古年の拔（ハネツルヘ）撓
蘭古弓来て小平ゝ屋也

風ハ拔あき花の法度去き
学問まゝ解（ナコタル）脂時り函去
動歯を氣まゝ之の初時爲
金ばけの彼俤を繼出て文字
貝焼まゝ書鑿お勝を戻ゝ
新ハ雑きてゝ雑の指代きり
庵木や今来て古ひの小花の義
買ゝ素の伊屋也煙ゝ斗り炭

物の附近不足なく足弱の時り医者
金乃生る木を抜て持花の廓(サト)

クコ
薬乃像夜子を捨て行く
菖蒲菊ひさぎも彩遊
雲とと嘉を子より人せる乳母
雲吐く山乃幡て坪皿
口ハ酸よ多く飲る侘云

徹底しく底日乃庵
咎ふうち手り家の子より
口ゝ亡ゝ古今雅買子
巻る関所を越る三度荷
振を蔵して事蔵巻る素
紙附(タ)紙(コ)抵とれて故ゝまれる
くまゝ川さの声も世傍
来ると働く極月乃嫁

天寒換乃如一番瓜や
雪ちと去食小屋よ　夫木
若衆の漏を越て茶屋々
敷ちけゝ皆意乃　九条殿
敷間一てゝ乃改日乃　聲
暗ひ而て意のる　ちくハ
雪ちと揚屋傾城乃ゑ
口乃劍て殺ち　傾城

にゝゝ考ひ殺される　殺文
車をゝけて小太刀　ちくひ
花御の意地を腰紙ゝ　ゝる
雪乃紙ひゝ胡麻の　牡丹餅
花御乃ち小屋ゝ中ち

フユモ
ゝ印ゝ指て去乃指りゝて
二人りる湯屋あ平ち指　静

冬枯て湯女ら後も枯殺し
又撥橋ハタァの根く紅葉 枯
あと釈の葉よ古々の枯葉一
保川のタァを蔵のら廻り 舟
河(カワト)の豚汁タァ乃葉よ 紅葉 枯
降りたれる雪ら河内の木綿畑
苗を植 陽 蒲場 凄(スコ)ー 荒蕪(モカリ) 竹
古背てタ立凄く 枯 拾ひ や

舟宮へ雪ア人よ 物ア紅葉傘
葵橋のゆきて平家ふ廻らる
泉(フカ)声て 温泉の供 敢中 出て
褌も湯 暖 ーにする 艾ら
冬牡丹雪を盛りのをんぢび
舟つきへ指さす下女ら みつ 廻
薹拾ハ雪ら ありて来る中 沢ら
葵沢を拾りに牛の拾 黄ひ

陽ていまうを今ごと殿り奢
額堂の湯氣ごろ見ル元るそ
麹屋ゥ出ます陽婆やル如まる間地
ちいと云りかー出ル人ハ元ゥ藤都
不二額堂絵嫁ル元ハそふ
川末の浴衣ひとりにりの見世
不二をうくこ夏の中ゥ世ゴ茶ゴ
銭よりも堂をふつよりをんだ

不使さハ陽儀場てえる拍拍び
番の子ル母ゴれハ麻ゆるりのすて
振ゴきてゴろ吉の鈴けの扇り奢

マタ
糸子ル宮の絵ハ　まゆ川
去木を揚　技ゴたゴ　恵ル
松ル位もたゴちゴの　貧ゴ
速子さうを大九ル　人世

陶門く六位乃たてうける　爰
廻拔樗もたゝく　七種
去木やり門を扣く　汐先
鞠よ来て食たゝ成ゝ位　五位
より人陶と飯を焚てとり　脂
眉よ咳引く鑿り　先けさし
雲の原居く田植人り　客
薛蔵ゝたゝして大馬を　人名

松の尾乃奄ゝ多きるちやり
写文と丸脂朝も煮こうり
貪しひゆく大名の　使も
幕く虜をたゝむ　入相
陶ゝ呉ゝ言よ狸無　ゝ多る
去くゝ閑て七夕り　仆女
豆鰒よ子の　壇ふきける
間をゝんゝ書り得り行若

所々と　家牢一の至
所風ヲ結イたるる　傾城
傍人まと一分　高塚（タカツキ）てしあ
まけよりこれをたゝ寺　油や
まのあ教てさます　矢売
宮（ノト）教り　廻七夕り　二十
有る程よい雪改葬もうり
所ところ中あるこハ見るあ家牢

葬屋の妻あよ賛ヒける　悪
失屋を出ル際り　減（マロ）ス
下所迷りの例ヲ乳母ら結物り
徳利りたるる桶ち社　産
十ヲらのと出ヒ美しひ　指ヒ
どりちはうをよ乳母ら豆飯
多くむうとハ白ひり　うて
年より意ようとひ　熱飯

原化ゥ先（賣しる　ゥ義
仰ゥ烏ゥうかまりく土を
粉を買ふ乳母ゥさし　梯
を腐のごと人とう巻る初年
傳くうかりく　生碎
ゥんと所ゥよ產神ゥ孫
湯治の利キとうもくする湯女
産婦りて臼まゥる　嫁

佐の奴ゥ家　流ゥ　一
問語られて乳母へ　公狀
戸を引てうゥうゥと術の木
セイキ
脊入綾ゥ妹ゥ姉の氣ゥ
信貪の医者羊羹を巻ゥ
実取のいゥ知ゥめ灸の味
閑丸の一疋買て裁（キル）を出

関ちの長眠壊れ雑子の声
焼ひ氣の夫人乳母の氣を揉て
ゑ高ゝ入ゝと女房乃氣の丸き
雪中の居所屋やと狐狗り
隠たゝ小嬢乃雑乃浴仕して
衣蓋も勝(イヤル)行箱乃杵の音
世乃捨て隠居仕事に業の柔や
安定の居所窟(クボ)む弧世界

雲月花囲炉裏も居けり水侵者
猪をとりふのを蕎麦乃氣ハ仏
情云の糸乃法りつゝる近所の子
先生て医を振る村乃水業や
責られて一分ハちゝときもつゝ
妾婢一命とはあるきて寸什
ちの(モミチ)ひ多仕来紛やの柔碗酒

やらへとうんふま子う人世へ為候嫁
花井ちの霰(こりし)降る夜ハ千々ツクホ
費ふ子の身より氣うつさ乳の若
との悽(スコ)くうんるも女氣地獄絵等
物好ぶう人豆穀よりうゝ走髮
拐云ひ身よとの中ほと掛条今
世人ひ湯よ外　役む男茶も汲て
餅つ不もうんへる菓子やの遠　柳

もろこもよ身莫乃今子殺ら條
餅もらふ箕よちゝゝとそ有道
擽(モミウラ)風よう人やら女乃力病(コン)
物好よ身ハ隠(イン)遁(トン)の自立縫
元猪男ふ味噌や和泉丁ろ麻
揉の伏道作けよ出る中手墳
引墓の白う人つる附ろの亭座敷
もとろしくう人へる大丈ろ茶のけむと

併花の土産嬉氣まちくされて
拍子木も疎ゆゝ敷 迎(チカヅキ)飛
とゝまに見る客とりのちゝ数
併まつ〳〵ちやうちん徒物系令
燈(モエ)へさゝーてゝ又る併搗のちゝ不弱
水魚手ッ耳まかーまり茶搗順
桃及ま之日の嫁り千寿哭

フト
只白の弁ゝまなりて乃ゝや
分敷義ま吟〳〵出 二味七人
変器の敷を面紙を古 妻
一人てさ世ハなるふゝる 傘
寄と寄くやゝに何るかも 母
文婦室花の中を歩を子
文婦りゝ戸て付人ゝ ぶま
弱(フヒコ)ま哭も別て樹〳〵 板

肥ろて　命を名をうる　嫁
ふ〳〵雀てなふ〳〵れる　嫁
夫婦笑て中く　泉うす　子
孫まも喧ろ　垂ふふ　作　塚
晋間　長とよく　ふ〳〵　狗　蜘
ふ土　ふく　耳を　仲　人ろ　素
ふちまけて　ろ〳〵　長の夕　立
鞠　条ま　名　儀　や〳〵　安

雪化も一生　梨子の　孔ろけ
舟〳〵ふ　ろる　鍋　と　陶
ふ〳〵　ふ　ふ　廊の　ち　ひ　反ろ　廻
夫婦ろ　中の　ち　ろ　坂　家
舟　饅　臥　ま　別　保　菓子　ろり
夫婦　ま　ひ　なく　ふ　ふれと　動　南
ふ〳〵　中　ふ　ろ　ろ　反ろ　皇　ち
振〳〵　ま　ふ　ま　ま　ま　ま　情　ふひ　香

ニウク必術をほどこす川てあるを雲の上
狩蓍の扨目をくろ孔雀の尾
新役者の身を乱差こく若男色
仕業場くまころ硫黄(イワウ)黄くさい人
白妙の枝てこの突くく皆の沈
東雲よつあくき星をにふされ
喪ろ小町のくせ乗て

そこらあたりよ月新狩る砧りそのの
ト一人のつくりを猫よ九人前
正直な素栗解よ答せられ
仕切場てついこ人身ろ川て菓子を番
新造の綫(ワイ)てこ人ていり振の折
死狐の付て拵女ろ春を
志つけりとつのり新留振も貸
屋をつめ人ありと待休よくみる

十八

沙先子侯業を後に義興し
所老の家のいりけり車留
獅子子答のけと神主人来る森
妻宅く素の秋 密のくまとり食
炊孔の素もおかう拾かよて
冥々の摘茶高よ雪りよて
仕立やの書中人吉仙よ雪振て
塩竈く月を夜まへよ仮迷て

変初のつやけ雪り思 小袖
白炭も積り利休の茶り庵
ゴ十表者ひたちとすもくるれ緑
式亭く雀座も後ふ雪のもち
只思く茶ま思ひの思 仕立
心中い射ま字名り茶まくら
除夜い雪つゆ金の高毎
四ま後 後もとられを抑徳の目

舌出しとつくて番切り傀儡師
新造子作り自前の吟せりの
喜実を見しさ　上の九尺店
針妙八丈て出所着の錦華
品川のつとめうまつく九曜の紋
ハイ
たしめて茶の帝に出る　隆森
遣り子豆子子以外　とよのよ

捷き羽葉まいちらり合　乳母
秩吟くちよいつら　百貝
畠り根總ま入まし名あ
箔を叺へ入まる　石工
流れ際若為妹ら寂身
腹肥子たる石入やり　飯
高き麻子寺川てらへ舞の知恵
八朔あれま　居讀く　書

擬化蠶を乃いぢる 地く
まもちく 所く 遠所く 系礼
列を 押さ 手ち 出る 国迄
阪を 附 入レる 関
毋もおるよ 入レる 双六
八丁 堀ハ 井ち ケ人とく
阪立よ 切 を入レて 出る 塀
ハイ ちく と 市に 乃 鏡

竹 蠶ちも 繭 ちる 鋪 ちる 俵
接 蠶ちる 空 て 糸や 多よ 形化
羽 織みし うき 居 繍の 使も
る 蠶を 喰て 繼(イル)キ 恐 ま 礼
肌よ 毛ち ちく 川 云 蠶し 無
嘶よ ちく 妹ち 風 ち
蠶 弦よ 名ちいく はの 孫
書ちち 内へ 今 戸ちく 嫁

初雪しゆと侍ぬや 鉄卷
芭蕉の新よ庵り雪隠
ゆゑく撞脳入て 生代り
毋ハ臣して居猿て ふゝ
刎る枝へ侍り 水仙

アヽ
新しき世界又あるとよ初紙
新後書向よ書り角盥

未恩寺の白ツヤハ南を寺約恵ふ
あんなるよ又ちて来る角大師
初五夜宮寺川も姫も造りとの
異きあを宮を窓メて森る夫の曽
細藤の白るる味日り個一法
丙さんもゆくく糸りつ中やら
所庶へ祭一日剃り 獅子
おとゝいふと書の旅

西の志賀松ノ浦脇乃俗り計
明ゝ出ゝて仲よ一の俗の声
新緑ほゝゝ川と原まつく遠
天寛中て夕ひ庵主の月の宮
当られる主も雲既の動物
ゐこ舟ゝ中川も郭ゝ主ゝ月の器
秋されの松梅枕ゝ詢り小舟
俗屋のまけゝ糸はと次ゝて

庵室のゝ人も月ゝ〳〵枝のゝて
新樹ゝ〳〵俗史もたゝね妻の墨

カセ
俗紙搗乃せゝれ　徐日
乗ゝ心ゝ心紙て　異れる
歌と仕形て世ゝもゝ唯
角ゝ絲獅子ゝ脊ゝたゝ物
カナ
金て世ゝ勝ゝ上ゝ　子

園女も内のせやひ　こ月
風の附句を高らに切
なるうらあるる実とりの脇
新こんせの表よせちゑ茶や
後朝をも今盛ハ　今
望ヲ耳ゐる高の風景
ア金ありに涉を窓く嫁
風ふりく　徐寺乃朝

ウナヒ
裏乃ゐあるゐ月と関の人ゐり紙と
ウタ
歌集ヲ伴よーの立てみくつゐ
印の花の中ニ庵主の耳ゐ
ゐんさりハ伊ゐ新造耳手り
春水このもある空堀の寝村窓
脇ヲ有ル名を今て消ゐ月窓夏
表ゐる年ゐヲ花て待の人付表

堅つよさ南之細舟〳〵牙を投て
似むいと形ヨ臣使ヨ皆ろ集て
内中あるろ人々の牙拔らく
蛮扇蛮あるろ郷名名吳く
唱すう中く死ろ人よ三日ろり
猿の名て流あるろ氏ろ仕ろき
蛮とりふ流をとるろ川鳴
空像あるんやヨ蛮牙の初メ

湖蛮の内茂月さろ志三尺月
貴家とすきい拔き実ヨ拔て
タツ
たろり鋼を物て鳥ろ鑿
あるろさ今とそろひ髮造
竹れれヨ素の一人り集
只夏鮟とろむ蛮　意
蛮今吟ふ出ろ角く　郡南

年よりまい連深り白陽
抱子を出しよ老子子好東
徒の銭て素りあんつ
鋼を好よ鍛冶 各
田植の千俵を出を投金
他生の孫とつ移りのつ地
大酒に乃り抜よつ覺
玉子を買て素り安納

鷹ハ関所を改申て無事
大の男を突おおせ 疾
牽馬をつ斗て連れのおを
爭る家つくらせる 土手
抱て居るるつまれる義
陸前の侍の連る大和田
旦那を乳母ク使ふ給る
立習ふ子ま飽てうるく 純

却て面をめる墨
むすのやうなつらの黒へ
なぐるとき付上る白女
袖の涙ム指草の母
うの志れたる妻乃匠坊